

朗読パフォーマンス「中之条への道」 原口比奈子

中之条ビエンナーレ 2015 アーティストトーク

2015/09/19

群馬県中之条町ふるさと交流センターつむじにて

こんにちは。原口比奈子でございます。伊参スタジオで展示しております。

アーティストトークに先立ちまして、

一言、ビエンナーレのスタッフの方にお礼申し上げたいと思います。

私は今回、ビエンナーレも、現地制作もはじめてでして、とても緊張していました。

知らない土地で、誰一人として知らない人たちの間で、自分は制作できるのだろうか、と非常に不安でした。

そんななかスタッフの皆さんは、私がいついつに行くというと、駅までお迎えにきてくれて、

そうです、「お迎え」っていうのが私はとてもうれしくて、「お迎え」ね、と思っていました。

それで制作中も様子を見にきてくれたり、夕方になると温泉につれていって来て、

帰るときは駅まで送ってくれる。

それが仕事だからといえばそうなのかもしれませんが、

私は、本当に、作家として大事にされていると感じました。

このことは、わたしが今後生きるうえで、わたしを温めてくれる大切な記憶になるはずです。

それでアーティストトークでは、現地制作のことを、朗読パフォーマンスでお話しようと思います。

その前に、制作についてかんたんにお話しますと、

私は即興をテーマにドローイングを制作しているんですが、

即興というのは、描く行為自体に神経を集中させることです。

その制作のときの感覚というのは、

私が線を描くというより、

線が描かれて動いていくのを私がただ見ている、という感覚です。

それは、川や海で水の流れを見ているのと似ています。

どんどん何かになってどんどん流れていく。

だから、私があれを描こうという感覚ではなく、

線が流れて何かの形になっていくのを、そのちょっと後から見ている、という感覚で制作しています。

これから朗読パフォーマンスを行います、

これも、いろんなものを見たりするとふと思い出すことがあって、いろいろなことを思ったりする、

そうやって思考を連想させたり飛躍させたりするのは、私たちの楽しみの一つだと私は思っています。

その様子を外から見ている、というのを言語表現によって、やってみようとする試みです。

## アーティスト・イン・レジデンスをめぐる話 ～朗読パフォーマンス「中之条への道」の前置きとして

中之条ビエンナーレは、現地制作、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）があって、それが今とても楽しみだ。

結構前のことだけど、中上紀が海外でのライター・イン・レジデンスのことをエッセイで書いていて、それは英語以外の言語つまり現地語で少数の人に向かって作家が書いていることについて書かれていて、世界中でたくさんの作家がそれぞれの場所でそれぞれの言葉で書いていて、たまたまここで何人かが一緒に暮らしながら書いている、その様子を想像するとなんだか温かな気持ちになって、レジデンスの印象がとてもいいものになった。

たしかカズオ・イシグロもレジデンスプログラムに参加していたように思う。アメリカには作家が大学に滞在して書くというプログラムがあるそうだ。

そのあと、3331 のスカラシップ賞で 3331 が AIR へ推薦してくれるという副賞があって、それで急に自分の問題として興味が高まった。どういふのがあるのか調べたり、WS に参加したりした。

そういえば、これはもっともっと前のこと、ある美術作家の展覧会のトークイベントで、彼女は、フランスの田舎のレジデンス・プログラムに行き、デジカメがまだ珍しかったころで、「今撮ったものがどうしてここ（液晶）に出るのか？」などと聞かれたと話していた。行く前にあらかじめ、昨年の参加者に電源は使えるのか現地の様子を聞きにいった、と。私は、そうか、そういうときは、前に参加した人に話を聞くんだな、と刷り込まれた。そんなことがあって、参加したことがある人や一緒に参加する人に様子を聞くことができるようになったと思う。前はそんなことできなかった。他人と自分は違うんだし、とか思ってた。今では、ちょっとしたことも無造作に聞いたりして、相手に驚かれたりする。

大竹伸朗の『ピ』を読むと、海外で滞在制作する話がよく出てくる。こんな感じなのかなあと勝手に想像をふくらませている。会場が決まったので、中之条にまずは一度行ってみようと思う。

※ 本稿は発表していない。「中之条への道」の完全バージョンは原口比奈子のブログで連載している。

<http://hinakoharaguchi.com>

## 中之条への道（アーティスト・トーク・バージョン）

原口比奈子

- 1 -

昨日、会場の下見に行った。会場が年末に決まり、秋のオリエンで見ていたけど、その時はほぼ全会場をさっと回って、どこがいいか考えるというためだったから、決まってからもう一度ちゃんと見ておきたいと思っていた。

会場となる伊参スタジオは、もともとは中学校である。手を洗うところに昭和 32 年寄贈の鏡があつたりして、なんだかすごいのだ。その後『眠る男』の撮影が行われ、その後もいろいろな映画の撮影に使われている。常には資料が展示されていて、眠る男のまさに眠っていた部屋も保存され見学できる。毎年映画祭も開催される。

私の会場は、スタジオの 2 階の教室の一つである。2 階は 5 つ教室がある。黒板がある教室には「日直：細川・高橋」なんて書いてあるし、机と椅子が置いてある教室もある。私の会場は何もなくて、ただ校舎の角にあたるので三方が窓で明るい部屋だ。室内は前々回の作家がきれいに白く塗ったらしく、そのままドローイングを描けそうだった。

最初にオリエンで下見に来たとき、ほかにも廃校になった学校がいくつか会場になっていて、自分の通った学校ではないけど自分の学校時代を思い出すなと思った。そんなことを昨秋、考えていて、今回、会場が決まって下見に来たわけだけど、とても不思議なことがあった。

中之条は高崎から吾妻線で 1 時間のところにある。3 両ぐらいでボックス席もある小さな電車だ。1 時間に 1 本だから、みんなその電車に狙って乗る、地元の人も観光客も。そこへ高 1 ぐらいの男子の集団 20 数人がどどっと乗り込んできた。大きなバッグを持っていたので合宿かなにか、けどユニフォームのようなことはなくて、私服で、引率の先生もいなそうだった。同じクラスの仲良しグループの旅行？ そのわりに人数が多いけど、というそんなグループ。

その彼らが、なんだかみんな楽しそうなのだ。ウキウキしながら、でも普段どおりに、小学生の下校のようにおしゃべりしている。その中の一人が、私が中学の時に好きだった子にそっくりだった。私はその子を見て、中学時代を強く思い出した。その子もいつも男の子たちの輪の中で笑っていた。わたしは数メートル先のボックス席の通路側に座っている彼を、間にあるいくつもの座席を越えてじっと見つめた。まるで修学旅行の車内のようだった。中学の時はこんなふうにストレートに見ることさえできなかったけど。

学校だった場所を見に行くのに、同級生に似た人を電車で見かけた。映画のはじまりのようだと思った。

スタジオの、というか学校の校庭のベンチでひとり、おにぎりを食べていると、こんなに天気がよくてこんなに広々としていて、あたりには人が一人もいなくて、びっくりするぐらいだあれもいなくて、自分の食べる音が体内に響く音、というものをはじめて聞いた。

校舎は古い木造だから、歩くと音がする。私しかいないから、音はすべて私のたてる音だけど、廊下の板材が長いものだから、こつちを踏むとあっちが飛び上がって少し遠くの方で音がするのが何度やっても不思議だった。誰かいるの？

ディレクターと相談をする。こういうふうな制作をするつもりだとか、原状復帰のこととか、滞在制作についてとか。壁に直接描くので、一度ちゃんと話をしておきたかったというのがあった。

本当は、自分の作品について「わたしどうしたらいいんでしょう、わたしの作品、大丈夫なんですか？」と聞きたいと思っていた。でも、そんなことを聞いてどうするつもりか、と思った。他人に責任をおしつけてどうする。まったく意味がないなと思ってやめた。

それより、「自分はこういう作品を考えている」と言うと、ディレクターは、「ここの扉は白く塗りましょう、その上に描いてもいい」と言ってくれたりして、わたしの制作の性質をわかった上で環境を整えてくれるのだ。これで十分じゃないかと思った。もう私は私のやるべきことをやるだけなんだと思った。制作のことは自分で考えるしかないと思った。もう学校じゃないんだから。いや、ここは学校だけど。

-2-

制作で滞在する作家は無料で温泉に入れるのが中之条ビエンナーレの特典の一つだ。毎夕、事務局の人が四万の町営温泉まで連れて行ってくれる。さすがに運転が上手で、山道もスイスイ、そしたら、道端に猿がいたのだ、5匹ぐらい団子になって。まだお母さんにだっこしている子猿もいた。顔が赤くて白い毛でかわいい。

レジデンスに着いた日、夜出かけるときは持って行ってください、万が一の用心です、と、玄関にたくさん熊鈴が置いてあった。町営温泉の壁にも「熊が何月何日に出ました」と注意書きが貼ってある。やっぱり出るんだ！

あとは、カモシカですね。でもカモシカは結構レアで、見たことがある人はそう多くはない、カモシカは別に逃げるでなく、まるでシシ神様のようにじっとこちらを見て、たたずんでいるんだそう。えー、会ってみたい、そういえば昨秋のオリエンのときにイノシシ見ましたよ。あ、そうでしたね、イノシシは直進してくるから危ないですよ。そんな話を温泉の行きかえりにした。

そして制作4日目の早朝、野うさぎを見た！ 朝5時に目がさめて、今なら描ける気がする、と、ガバッと起き上がり、急遽現場にでかけることにした。と言っても歩いて5分だ。だから朝の5時半ごろ、わたしは朝露で湿った道路を登っていく。反対側の歩道を上から小さい動物が駆けてくる。ねこかなと最初思った。でもねこにしては小さい。じゃ、こないだ見たこぎるかな、茶色いね、いたちかな、と思っているうちに、それはどんどんわたしのほうへ近づいてきて、うさぎだとわかった。ぴょーん、ぴょーんと跳ぶ。本当にうさぎって跳ぶんだ、と思った。まさにこれが野生のもののもつ「跳躍」。後ろ足で蹴って前へ伸びていく。速い。

あっという間にいっちゃうんだろうな、と思った。そしたら、急に私の5mほど前で急停止して、森のほうを見つめた。私のほうへおしりをむけて、うさぎじゃありませんよ、ボールですよ、と言っているようだった。茶色い小さい毬。でも、化けきれてないぞ、ちいさな耳が見えている。

時間が止まったような気がした。どうなるんだろうと思ったが、今度は90度曲がって森のほうへ跳ねて行ってしまった。

- 3 -

わたしが現地制作に行ったのは5月末で、まだ時期が早いせいで、元小学校だったレジデンスには他の作家は一人も宿泊していなかった。それで、他の作家さんと交流できなくて残念ですね、と言われることがあった。AIRの主目的の一つに、他の作家との交流があるからだ。

ただ、わたしの場合、他の人と交流するととてもエネルギーを消耗するので、かえって助かった、という気持ちが強かった。わたしの制作の性質上、エネルギーはなるべく温存して制作に振り向けたい、でなければ何のために行ってるのかわからなくなる。

とはいえ、誰とも交流しなかったかといえばそんなことはなく、前述のように事務局のスタッフの方とはずいぶん親しくなった。わたしが温泉に浸かっている間も、会場の写真撮影だ、現地の状態を見るだ、道を確認するだ、と忙しく仕事をしているらしかったが、今日は仕事が早く終わったから一緒に温泉に入る、なんていうこともあった。いいねえ。ドライブしたり温泉に入ったりするとプライベートの話題も出て、中之条の普段の暮らしを知る。またあるときは、画材のマッキーが足りなくなったから自転車で買いに行こうと思う、と言ったら、いや山道だし大変だよと、遠回りしてお店に寄ってくれた。こういうのも、わたし一人だけだから可能なことだ。

車がないとアシが不便だけど、だからこそ送ってもらったりして仲良くなれたのかもしれない。毎日顔を合わせていると、ちょっとした相談もしやすかった。

誰もほかに泊まらなかった、と言ったが、最終日、Mさんという作家が夜遅く到着した。毎週土日に通って来ているらしかった。朝ごはんを一緒に食べながら話をする。ビエンナーレの記録映画を作っているということで、さっそく取材の約束をした。

それと、もう一人の作家のMさんがのぞきにきてくれた！ 懐かしい顔を見てホッとした。しかも、おいしいお団ごを差し入れに持ってきてくれた。わたしは、なんだか心からうれしくなって、調子に乗って「四万のお団ごおいしい」と作品に書いた。最終最後のところでガソリンが入って、もうひと踏ん張りできた。ここのところを描くときはノリノリで、かなりスピードが速かったと思う。よっぼどうれしかったんだろう。

月末に現地制作に行くつもり、とメールで連絡したら、自分は土日に行くから時間があつたら寄るかも事務局に用事があるし、と返事があつたにはあつた。たしかにMさんのものらしい作品素材が山のようにレジデンスの玄関に置いてあつて、これを受けとりにくるんだなとは思ってたけど、やっぱり寄ってくれてうれしかった。山籠りしていて、ひさしぶりに会った「人」、だ。Mさんは、前回、伊参エリアに出展していて、わたしはMさんからレジデンスのことや伊参スタジオのことを事前に教わった。

このMさんが伊参スタジオの管理人のSさんのことも教えてくれたのだ。元校長先生なんだよ、ということだったが、実際Sさんに挨拶に行ったときも、全然偉そうじゃなくて、ご本人の口からはそんなことは出ず、ツナギを着て、校庭の草刈をしたり、畑仕事をしたり、掃除をしたりしている。それで一日に一回、いっぱい描いたね、と様子を見に来てくれる。わたしは脚立を借りたり、ドライバーを借りたり、台所を借りたり、モップを借りたり、電話を借りたり、借りてばかり、とにかくお世話になった。わたしは毎朝8時半に「おはようございます!」、夕方4時半になると「お先に失礼します!」と挨拶し、施工の仕事か何かで通勤してる感じだった。たまにSさんの「仲間」が訪ねてきて、校庭の椅子で3人でのんびりしている。わたしの作品も見に来た。聞けばお一方はビエ

ンナーレを始めた当時の副町長さんだそうだ。そういえば、ある時「原口さーん！カツキから電話ー！」と呼ばれた。え、カツキ？ だれ？ と思ったら、ビエンナーレ事務局のYさんのことだった。下の名前と呼ぶんだ、と思った。みんな顔見知りなんだなと思った。Sさんはビエンナーレでは会場の管理もするそうだ。多い日は一日1000人来るよ。元校長先生が、引退後、元学校で管理人をして、昔の仲間とお茶を飲んだり、観光客の相手をしたり、ビエンナーレや映画祭の手伝いをしている、なんか映画みたいな話だ。

-4-

日曜の夜、現地制作から帰ってきた。荷物を解いたり洗濯したり、月曜から通常営業。ずっと早起きしてたのに下界におりてきたらさっそく夜更かしして、そのせいか翌月曜はぼんやりすごした。そして、とても心がざわざわして、さいごは大声で泣きたくなった。わたしはここにいるはずじゃないのにな。最初、この気持ちはなんだ？ と思った。でも、これ、ホームシック。そんなに長くいたわけでもないのに罹患した。帰りたい。

さっき、下界、と言ったけど、本当にそう。余計なことを考えず、100%作家として制作に集中した特別な時間だったように思う。そのときはそんなに特別に思っていなかったのに、離れてみて、下界から山の上のあの場所のことを考えると夢のような気持ちがする。あそこにあるんだな、と思う、私が作家として暮らした5日間が。

こういう感覚はいずれ薄れていくだろう。でも、しばらくは思い出して暮らしていこうと思う。こういうものを持つのは、一つの幸せ、といってもいいのじゃないだろうか。つらくて泣きたい幸せがわたしに新しくやってきた。

-5-

それでMさんのドキュメンタリー映画のインタビューで、こんな質問があった。

— 中之条という場所ならではの制作はどんなことでしたか？

言い回しがちょっと違ったかもしれないけど、ニュアンスとしてはそんな質問だった。

中之条ビエンナーレでは、町の人に取材したり、町の歴史をリサーチしたり、町にあるものをモチーフにしたり、伝統技術を活かしたり、といった地元資源を利用した制作をおこなう作家も多い。

だが、わたしの制作の場合、具体的にそういったことはない。たしかにうさぎを見たことなんかは書いたけど。

原美術館にある奈良美智の常設作品「My Drawing Room」の解説にこんなことが書いてあった。

作家は、「アトリエはどこも同じ様子ですが、外の景色で、ここは日本だなあ、ここはドイツだなあ、そしてここは原美術館だなあ」と思うそうです。

そして保坂和志はこんなふうには書いている。

このように激しい風が吹き荒れる音がほとんどやすみなくつづいている夜が人の、というのは私のコンディションに影響を及ぼさないはずがない、

そうだよ、と思う。

わたしの作品のあらわれようはいつもと同じで、作中に具体的に何というのはなくとも、この場で時間を過ごしながらか、というのつまりこの場に身を置いて窓から見えるこの場所の景色を眺めながら制作していたことが、私に影響を及ぼさないはずがないのだ。

そして村上春樹も、『ノルウェイの森』はローマで書いていて、あの作品のことを考えると内容のことよりもローマで暮らした記憶、執筆していた環境のことを思い出すと書いている。

そういう意味で、わたしの作品はあの場所と深く関係を持っていると思う。

-6-

2回目の制作で急に紙に描くことになったのだけど、当初はガラスに描く予定だった。それで、ガラスに描く用に水性マッキーとダーマトグラフを用意していったのだった。

それが偶然、紙に描くことになって、鉛筆も使ったけどダーマトグラフも使った。これが、強く描くとねっとり紙に吸いつき、弱い力でものびやかでいい感じだ。ずっと同じ鉛筆を使っていると描き心地に飽きてくるので、6B、3B、2B、HB、F、ダーマトグラフ、木炭、と並べながら順々に使った。このラインナップは別にこだわりがあつてのことではない、3B、2B、HBは文房具として持っていただけ、6B、F、木炭は事務局にあつたのを借りただけ。細くて固いものはそのように、太くて柔らかいものはそのように紙に描かれた。最初は迷いつつ描いていったが、そのうち何も考えずに描いた。

偶然ダーマトグラフを持っていたのだがしかし、この偶然は急に降ってくるような偶然ではない。前になにごとかを意図して、だからこそ生まれるもの、わたしの制作はいつもそんなことだ。前に試しにやったことが今回生きたとか、いつものを少し変えてみたとか。とにかくやってみることだ、無駄なことはない、ちゃんとやれば次はくる、うまくいったかどうかは別として、こうやって少しでも前進していきたいものだ。

今、気づいた、なぜダーマトグラフを持っていたか、半年前の冬観た作品に使われていたからだ。それで、ふうん、ダーマトグラフか、と思ったんだ。それに、サイ・トゥオンブリーがダーマトグラフのような、たぶんオイルスティックがそれなんだと思うんだけど、赤い文字を描いていたのがよかったから、それは原美の2階の一番奥のギャラリーで展示されていた作品だけ、だいたいトゥオンブリーの作品はほとんど「無題」だから困る、言葉でタイトルを指し示せない、  
そう、ダーマトグラフね、と思ったんだ。それで前回の現地制作の際にも一応持って行っていた。そう考えるとやはり、偶然とは言えない。水中深く沈潜しふとしたときに頭をもたげる。

そういえば、紙に描いたのだから本当は偶然でもないんだ。

-7-

写真を整理していると、途中の感じのほうグッと来る。過渡期にあるもの、現在進行形のもの、ベクトルを感じる。

会期が終わったらペンキでもとに戻しちゃうんだよ、と言うともったいないという人もいる。

しかし、もったいないというなら、いっそわたしはこのすべてをとっときたい。この時間も空気も全部、ぜんぶ。一瞬一瞬その場で思ったこと、全身で受けとったすべての体験を。本当はそう思う、だけどそんなことはできない、